

## 2025. 2. 1 毛糸遊びからの学びとは

ここ最近、年長では毛糸遊びが広がっています。

始まりは、12月。寒くなってくると、園ではマフラーづくりをし始める子が出てきます。特に年長児がやりはじめ、それが年中、年少へと広がっていきます。それと同じころ、毛糸を三角錐にした紙コップに巻いて、クリスマスツリーやそれを頭飾りとしてつけている子がいました。そのようにして毛糸が遊びの中に使われ始めます。

年明け、教師はマフラーづくりを生かして、へびを作ったり、毛糸のポンポンで鏡餅を作ったりしたものを環境としてそっと置いておきます。そこから、毛糸に興味をもった子たちが、マフラーづくりをしたり、ポンポン作りをしたり、あやとりをしたりと少しずつ遊びの幅がひろがっていききました。

マフラーづくり自体も、みんな9本で作っていたのを棒を増やしたらどうだろうと13本、17本で挑戦してみる子、指編みで作ってみる子など遊び込んでいくうちに、オリジナル性を求めて広がりも見られます。

先日、アイスの棒と毛糸で雪の結晶のモビールを作って遊んでいる子がいました。みんなの時間で雪の結晶を紹介しながら、教師はこの棒をいろいろ組み替えていくと形が変化していくことをちょっと投げかけます。「あ！四角になった！」「今度は5角形！」「6本つかったらどうだろう？」「10本つかったらどんな形になるんだろう？」「なんか魚みたい」など子供たちはいろいろな想像をしながら、かたち遊びへとつながっていきます。

その次の日、いつもマフラーを作っている子が、今日は太いモコモコした毛糸で作ろうとしていました。でも毛糸が太くて、いつもの割箸9本で作るのがきつく、「7本にしようかな…」と割箸の本数を減らします。それでもきつく、「5本ならどうかな？」とさらに減らします。すると、「これならできそう！」と毛糸をセットしていきます。すると、真ん中に突然☆マークが現れます。「あ！星ができた！」とその子は目を丸くして言いに来ます。偶然の出会いです。その横であやとりをしていた女の子が、「ほら、指でもほしができるよ！」と見せに来ます。☆と言う形でつながっていきます。

そして、5本でマフラーを作っていく途中に、「あれ？なんかマフラーの真ん中、五角形だ！」とその子はつぶやきます。「いつもと中の形がちがうね！」とその変化も嬉しそう。出来上がると、端っこにポンポンをつけ、温かそうに首に巻いていました。

毛糸はその質感に温かさを感じ、子供たちに安心感を与えます。そして、毛糸は扱いやすく、またカラーバリエーションが豊富なので、色にこだわり自己表現へにもつながっているように思えます。また、毛糸の太さによってもいろいろな違いが生まれています。細い毛糸で作っている時、「なんかクモの巣みたいになってきた！」と喜んでいる男児もいました。毛糸を編むことで、見えてくる新たな世界があります。

毛糸での雪の結晶作りでは、折り紙の切り絵としての雪の結晶、そして外の雪を取ってきて雪を顕微鏡でみた経験などいろいろな遊び、体験が遊びを超えてつながっています。

最近ではあやとりも興味をもつ子が増えてきて、ハウキやゴムなどの技を始め、腕抜きや指ぬき、コイン通しなどのマジックをする子も出てきました。また二人あやとりに挑戦する子たちもいます。

今までは、冬になると毛糸でのマフラーづくりが始まり、マフラーができるとそれで終わってしまっていました。それ以上の広がりもありませんでしたし、教員もそこまで意識もしていなかったように思えます。

でも毛糸遊びの価値をもっと高めることができないかと、いろいろな展開や環境構成を今考えています。

材としての価値を高める、新たな価値を生み出すには、雪の結晶や形遊びのように、それぞれの遊びの枠を超えてつながっていくことが大切なのかなと毛糸遊びを通して感じています。そしてそれを支えるために、毛糸一つでもこんなに色々な遊び、表現ができるんだよという提案を教師がしていくことも大切なように感じます。

まだまだ試行錯誤中でなにが正解かはわかりませんが、毛糸という素材も好きになってほしいと願いながら、子供たちと一緒に楽しみながら毛糸の魅力をもっと発掘していきたいと思っています。

